

魯迅と日本の自然主義文学

—『呐喊』『彷徨』に見える自然主義的手法の検証を中心として—

李 佳

要 旨

本稿では、今までの先行研究で詳しく論じられていなかった魯迅小説と日本の自然主義文学との関係を探るべく、魯迅の小説集『呐喊』と『彷徨』における日本の自然主義文学の受容状況について考察を試みた。具体的には、日本の自然主義文学における前期的特徴である「社会批判性」と、後期的特徴である「事実性」「焦点人物」が魯迅の作品中に設定されているか否かを一つの指標として検証作業を実施した。その結果『呐喊』と『彷徨』は、特定の時期の自然主義文学の影響を受けたのではなく、前期・後期双方の特徴を兼ね備えていることが確認され、今後更に自然主義文学の受容状況を多角的に検証する必要があることが明らかになった。

キーワード：魯迅／自然主義／小説

はじめに

周知のことではあるが、中国において魯迅（1881－1936）は「偉大な文学者、思想家、革命家」と高く評価されている¹。ただ、これは中国国内の評価に由来する面も考慮しなければならず、筆者はより客観的・多角的な視点から魯迅文学の再検討を試みている。そのため論者はその考察の一環として、日本留学を経験した魯迅が、当時の日本の文学思潮をどのように受容しているのかに関心を抱いている。

特に日本では、増田渉や竹内好をはじめ『大魯迅全集』²『魯迅選集』³『魯迅作品集』⁴、『魯迅評論集』⁵など、魯迅作品に関する翻訳や研究書が数多く発表されたが、魯迅作品と、魯迅の留学期間に流行していた日本の自然主義文学との関係については、さほど研究が行われていない。例えば魯迅と日本の自然主義文学との関係については、魯迅とほぼ同時代人で文学者の成俣吾は1942年に以下のように述べている。

魯迅先我在日本留学，那時候日本文藝界正是日本自然主義盛行，我們的作者便從那時受了自然主義的影響，這大約是無可置疑的⁶。

（魯迅は私より先に日本に留学に行った。そのときの日本の文藝界ではちょうど日本自然主義が流行していた。魯迅はその時から自然主義の影響を受けたということは、疑いがない。）（論者訳）

また魯迅の実弟・周作人も『魯迅的青年時代』（2002年）の回想の中で、

自然主義盛行時、(魯迅)亦只取田山花袋の小説『棉被』一読、似不甚感興趣。(中略)那时候日本大談自然主義、(魯迅)這也覺得是很有意思的事⁷。

(自然主義が流行っていたとき、(魯迅)はただ田山花袋の小説『蒲団』を読んだだけで、興味がなかったらしい。(中略)そのとき日本では、自然主義が盛んでいて、(魯迅)もこれ(自然主義)は面白いことだと思っていた。)(論者訳)

と述べている。つまり魯迅は田山花袋の作品『蒲団』にはさほど興味を抱かなかったものの、自然主義には関心を抱いていたことがうかがえる。その事実を裏付けるように魯迅と周作人が刊行した『現代日本小説集』(1923)⁸にも、魯迅自らが有島武郎の私小説『小き者へ』と『お末の死』を選定し翻訳している。この事実からも魯迅は日本の自然主義文学に何らかの関心を抱いていたと推測できる。

そこで本稿では、魯迅の小説創作と日本の自然主義文学との関係について検討するために、魯迅の小説が具体的にどのような形で日本の自然主義を受容していたのか、その具体的受容状況を探ることとしたい。

1. 日本の自然主義文学

本章では、まず考察の前提となる日本の自然主義文学の概略と、その定義の問題について確認を行いたい。日本の自然主義文学についての先行研究は極めて多く、本稿でそれらを逐一紹介する紙幅を持たない。そのためここでは行論の都合から日本の自然主義文学の概略と、その定義については、『岩波講座 日本文学史』に見えるキルシュネライト氏の論述に従うこととする。まず自然主義の定義については、以下の記述が見られる。

「自然主義」という用語(中略)ははじめのうちになかなかあいまいに、たとえ著者自身がヨーロッパの自然主義をまったく意識していない場合でも、いろいろな作品に適用された。(中略)「自然主義」、あるいは「自然派」という呼称は、明治三十年(一八九七)にはまだ、「単に、客観的、写實的傾向」を指すものしかなかった。やがて自然主義という用語は、ヨーロッパの文学潮流を指す言葉として定着していた⁹。

とある。そして自然主義の影響を受けた田山花袋は「露骨なる描写」¹⁰(1904年)を発表、自分の作品を貫く論理を明示したほか、島崎藤村の「破戒」(1906年)¹¹や田山花袋の「蒲団」(1907年)¹²など、日本の自然主義文学の代表作が生まれた。このように「破戒」と「蒲団」の発表によって、日本の自然主義文学はヨーロッパの自然主義文学の模倣から離れ、独自の道を歩み出したという(後述)。

また、キルシュネライト氏によれば「田山花袋の「蒲団」をはじめ、自然主義における恋愛のテーマというものは、同時に、作家たちの私的な領域への退却という傾向のしるしでもあった。自然主義文学が、主観と感傷の特徴を示し始めるとともに、社会批判という要素はやがて失われてい

く。」¹³と説明し、その結果として、日本の自然主義文学は「私小説」に変質したという。更にキルシュネライト氏は、日本の自然主義文学が私小説に変質したことについて、以下のように説明している。

『破戒』において、(中略)二つの傾向、即ち、社会批判的性格と告白文学的性格が共存していた。やがて、この作品の一年半後に出た、田山花袋の短編『蒲団』が成功を収めるに及んで、後者の傾向、即ち自己にかかずらう私的な観察眼が優位を占めるようになり、これが、その後の日本文学全体の発展を規定するものとなる。(中略)本来、ありのままの人生を事実忠実に描写することは自然主義の理論から導き出された、できる限りあからさまな自己表出の方法は、やがて偏って狭められた形でしてゆき、(中略)私小説的なパターンは、後期自然主義を支配しただけではなく、ほかの流派の作家たちにも長期にわたって影響を与え続けた¹⁴。

このようにキルシュネライト氏によれば、日本の自然主義文学が私小説に変質したのは田山花袋の『蒲団』からであるという。そして本作品が画期となり、日本の自然主義文学が前期と後期に分かれたと指摘している。その上で自然主義文学の後期の部分、いわゆる私小説について、キルシュネライト氏は以下の説明をしている。

私小説様式の、抽象化された基本的特徴を含んでいる、構造モデル(中略)は、「事実性」と「焦点人物」と呼ばれる、相互に依存しあう二つの要素である。

「事実性」とは、(中略)「作品は、作者が経験した事実を直接再現している」との想定を指しており、(中略)二つ目の基本的な特徴である「焦点人物」とは、(中略)語り手、主人公、作者の一致を意味し、(中略)「焦点人物」は、常なる内的視点と、「ともに歩む」時間順の語り特徴としている¹⁵。

このように、後期日本の自然主義文学、いわゆる私小説は「事実性」と「焦点人物」という要素によって、小説の中心内容は作者が経験した個人的な事実の再現に限られるようになり、最終的には前期の社会批判的性格という要素がだんだん失われていたという。

以上はキルシュネライト氏の論述に従い、日本の自然主義文学についてまとめたものである。ただ注意が必要な点も存在する。それは、日本の自然主義文学の全体を見ると、決してキルシュネライト氏が述べた「社会批判的性格」、「事実性」、「焦点人物」の三つの要素だけが存在するわけではないということである。例えば、初期の日本自然主義文学は「外から描いて内面にはいっていない、対象や題材を自己の問題として主体化していない」¹⁶とあるように、客観的な描写という他の要素も存在し、それも念頭に置いた考察も必要である。ただ小論では、紙幅の都合により、キルシュネライト氏の自然主義文学論に基づき、前期日本の自然主義文学の社会批判的性格と、後期日本の自然主義文学、いわゆる私小説の二つの要素である「事実性」と「焦点人物」の観点に限定して、魯迅小説に分析を加え、魯迅作品における自然主義文学の影響を検討したい。

2. 「頭髮的故事」に関する検証

本章では、魯迅が書いた小説集『呐喊』の中の「頭髮的故事」に注目し、作品に描かれた日本の自然主義的な要素について検証したい。

「頭髮的故事」は、1920年に発表された小説である。「頭髮的故事」について、実弟・周作人の『魯迅小説裏的人物』には、以下のような記述が見られる。

頭髮的故事也是自叙体的, 不過著者不是直接自叙, 乃是借了別一个人的嘴來說整篇故事罷了。(中略) 這裏關於頭髮的故事, 可以說是分成三段來說的。(中略) 第二段是故事的中心, 講清末民初的事, 乃是魯迅自己的經歷, 大抵都是事實¹⁸。

（「髪の話」も自叙体（私小説風）のものだが、作者が直接自分のことを語るのではなく、別の人物の口を借りて物語の一部始終を語らせている。（中略）ここでは「髪の話」について、三つの話に分けることができる。（中略）その二は、この物語の中心で、清末から民国初め、つまり魯迅自身が体験したことで、ほとんどみな事実だ。）¹⁹

と「頭髮的故事」の作品分析を行っているが、日本時代に魯迅と同居していた実弟自身が本作品を私小説であると言及しているため、自然主義の影響を受けた魯迅作品と考えて大きな間違いは無かろう。そこで「頭髮的故事」の中で論者が注目した自然主義手法の影響と思われる箇所〔資料1〕～〔資料4〕を抽出し検証作業を実施した。

〔資料1〕「焦点人物」に関する検証

〔資料1〕は小説の冒頭の部分であり、「私」が「双十節」についてカレンダーに何も書いてなかったことを語った後、「私」の話を聞いた先輩のN氏の反応が書かれている。その場面を紹介したい。

我的一位前輩 N 先生, 正走到我的寓里來談閑天, 一聽這話, 便很不高興的對我說:

“他們對! 他們不記得, 你怎樣他; 你記得, 又怎樣呢?”

這位 N 先生本來脾氣有點乖張, 時常生些無謂的氣, 說些不通世故的話。

（ちょうど先輩のN氏が私のところへぶらりとやってきていたが、私の言葉を聞くと、とたんに不機嫌になって私に言った。

「彼らのほうが正しいのさ。彼らが憶えていないからって、君にはどうにもなるまい。君が憶えていたからって、それがどうだっていうんだ。」

このN氏はもともと気むずかしいところがあり、始終わけもなく腹を立て、浮世離れたことを言う。)²⁰

〔資料1〕にある下線部の「N先生」についてであるが、周作人の『魯迅小説裏的人物』によれば、魯迅は自ら「N氏」という人物を作り出し、語り手である「私」に代わって、物語の一部始終

を語らせていることが理解できる。その上で、魯迅自身は語り手の「私」として裏に隠れ、「N氏」の話の聞いただけとなっている。『2002年魯迅研究年鑑』所載の李明「論魯迅自我小説中的自我表現形式」では、この手法を「分裂的自我」²¹と呼んでいる。『魯迅小説裏の人物』の周作人の話と『2002年魯迅研究年鑑』を合わせて見れば、魯迅は自分自身を「N氏」と「私」とに分けて作品に登場させる設定した可能性が高く、これらの技法は、日本の自然主義文学の特徴の一つである「焦点人物」を含んでいると判断できる。

〔資料2〕小説の中心内容における「事実性」の検証Ⅰ

次の〔資料2〕は、本小説の中心内容の一つであり、N先輩が日本に留学していた時、辮髪を切ったという事件の紹介である。

“我出去留学，便剪掉了辮子，這并没有別的奧妙，只為他不太便当罷了。不料有几位辮子盤在頭頂上的同學們便很厭惡我；監督也大怒，說要停了我的官費，送回中国去。”

“不几天，這位監督却自己被人剪去辮子逃走了。去剪的人們里面，一个便是做『革命軍』的鄒容，這人也因此不能再留学，回到上海来，后来死在西牢里。你也早忘却了罷？”

（「僕は留学すると、辮髪を切った。別に深いわけがあったわけじゃない、とにかく不便だったからだ。それなのに辮髪を頭の上にぐるぐる巻きにした留学生仲間の連中に恨まれた。監督もかんかん怒って、僕の官費をとめて、中国に送還すると言うのだ。」

「しかし数日もしないで、この監督自身が人に辮髪を切られて逃げてしまった。切った連中の一人が、『革命軍』を書いた鄒容さ。この男もそのために留学を続けられなくなり、上海に帰って、そのあと租界の監獄で死んだ。君ももう忘れちゃっただろう。）」

『魯迅年譜』によると、「（魯迅）在江南班中第一个剪掉辮子」²²（（魯迅）は江南班で真っ先に辮髪を切った。）と書いてあり、1903年3月のこととなる。また下線部の「監督也大怒，說要停了我的官費，送回中国去」（監督もかんかん怒って、僕の官費をとめて、中国に送還すると言うのだ）という箇所について、黄喬生の『周氏三兄弟・魯迅三兄弟恩怨變遷』は、以下のように述べている。

看到學生們紛紛剪辮，清廷駐日使館的學生監督坐不住了。負責江南班的名叫姚文甫，更是氣憤填膺，聲言要停了剪辮學生的官費，並將他們遣送回國²³。

（學生たちが次々と辮髪を切ったのを見て、清朝の駐日大使館の學生監督は我慢できなくなった。江南班を監督する人の名は姚文甫である。彼はもっと怒って、辮髪を切った學生たちの官費を中止し、學生たちを中国に送還すると言った。）（論者訳）

下線部の「不几天，這位監督却自己被人剪去辮子逃走了。去剪的人們里面，一个便是做『革命軍』的鄒容，這人也因此不能再留学，回到上海来，后来死在西牢里。」（しかし数日もしないで、こ

の監督自身が人に辮髪を切られて逃げてしまった。切った連中の一人が、『革命軍』を書いた鄒容さ。この男もそのために留学を続けられなくなり、上海に帰って、そのあと租界の監獄で死んだ。)の箇所について、周作人は『魯迅小説裏的人物』の中で以下のように述べている。

那一年有个姓姚的，(中略)被学生捉奸，剪掉辮子，(中略)捉奸的学生中有鄒容，他為了所写的革命軍，在上海被捕，(中略)他死于西牢²⁴。

(その年、姚という監督官が、(中略)密通しているところを留学生に押さえられ、その辮髪を切られた。(中略)密通の現場に踏み込んだ学生の中に鄒容がいた。彼は『革命軍』を書いたために、上海で逮捕され、(中略)イギリス租界の獄中で死んだ。)

このように、『魯迅小説裏的人物』の中の記述と本小説の内容とは、ほとんど相違点を見出せない。魯迅が実際に聞いた話をそのまま「頭髮的故事」に記載したものと充分推測できる。このことから資料2で紹介した事件も、魯迅の実際に体験した事件であり、日本の自然主義文学の特徴の一つである「事実性」を含んでいるものと判断できよう。

〔資料3〕小説の中心内容における「事実性」の検証Ⅱ

〔資料3〕は、〔資料2〕と同じく、本小説の中心内容の一つである。〔資料3〕では、N先輩が「私」に話しかけている。話の内容は、N先輩が辮髪を切り、中国に帰国後に、周りの人が辮髪を切った自分を見た後の反応である。

過了幾年，我的家景大不如前了，非謀点事做便要受餓，只得也回到中国来。我一到上海，便買定一条假辮子，那時是二元的市价，帶着回家。我的母親倒也不說什麼，然而旁人一見面，便都首先研究這辮子，待到知道是假，就一声冷笑，将我擬為殺頭的罪名；有一位本家，還予備去告官，但后来因為恐怕革命党的造反或者要成功，這才中止了。

(数年経つと、うちの暮らしがすっかりいけなくなってね。僕もしかたなく中国に帰った。上海に着くと、まずかつらの辮髪を一本買った。当時の値段で二元だった。それをつけて家に帰った。母は案外何も言わなかったが、まわりの連中は顔を見るなり、まずこの辮髪の研究だ。かつらだとわかると、フンと笑って、首切り者だと来た。一族のある男なんかは、役所に訴えて出ようとまでする始末さ。そのあと、革命党の謀叛が成功すると困ると思ったものだから、やめたがね。)

下線部の「過了幾年，我的家景大不如前了，非謀点事做便要受餓，只得也回到中国来」(数年経つと、うちの暮らしがすっかりいけなくなってね。僕もしかたなく中国に帰った)に似た記述は、魯迅の『集外集』「俄文訳本「阿Q正伝」序及著者自序伝略」の中に存在する。

終於，因為我的母親和几个別的人很希望我有經濟上的幫助，我便回到中國來。²⁵

(結局、母およびほかの何人かが、私に経済的な援助を強く望んだため、中国に帰った。)²⁶

また、魯迅『且介亭雜文』の「病後雜談之余」にも、〔資料3〕の内容と類似する記述がある。それには、

我的辮子留在日本，一半送給客店里的一位使女做了假髮，一半給了理髮匠，人是在宣統初年回到故鄉來了。一到上海，首先得裝假辮子。(中略)裝了一個多月，(中略)索性不裝了，(中略)走出去時，在路上所受的待遇完全和先前兩樣了。(中略)最好的是呆看，但大抵是冷笑，惡罵²⁷。

(私の辮髪は、日本にのこしてきた。半分は、旅館の女中にやってかつらを作らせ、半分は、床屋にやって、本人は、宣統初年、故郷へ帰ってきた。上海に着くと、まずは、かつらの辮髪をつけなければならなかった。(中略)一ヶ月あまりかつらをつけて、(中略)いっそ、つけるのをやめよう。(中略)外出の時、路上で受けた待遇は以前とがらりと変わった。(中略)むしろぼんやり見ているほうがよいが、大抵は、冷笑、悪罵であった。)²⁸

とあり、「病後雜談之余」の中に記述と〔資料3〕の内容はほぼ一致する。

「頭髮的故事」を分析する前に、まず、『且介亭雜文』の書いた内容が事実かどうかについて検討を加えておこう。『且介亭雜文』の序文の中には、以下の記述が見られる。

這一本集子，(中略)是我在去年一年中，在官民的明明暗暗，軟軟硬硬的圍剿“雜文”的筆和刀下的結集，凡是寫下來的，全在這裏面。當然不敢說是詩史，其中有着時代的眉目²⁹。

(この文集は、(中略)私が昨年一年間に、官・民の公然たる、あるいは暗々裏の、硬軟とりまぜた「雑文」に対する包圍攻撃の筆と刀の下でまとめたもので、すべて執筆したものは残らず、ここに収めた。当然、詩史とはいいかねるが、そこには時代の面影をとどめている。)³⁰

この序文によると、『且介亭雜文』は「詩史」とは言えないが、「有着時代的眉目」(時代の面影をとどめている)ため、さらに「雑文」は直接性と迅速さを以って社会生活を反映する文芸的な論文であるという³¹。そのためここでは一定の事実性が含まれるはずであり、『且介亭雜文』の「病後雜談之余」の中で書かれたかつらの辮髪をつけたことは、魯迅の実際の経験だと言えよう。つまり、魯迅は自分の経験を材料として本小説(「頭髮的故事」)を創作した可能性が高いと言える。

また、下線部の「有一位本家，還予備去告官」(一族のある男なんかは、役所に訴えて出ようとまでする始末さ)について、黄喬生の『周氏三兄弟-魯迅三兄弟恩怨變遷』には、「本家的伯文叔甚至揚言要去告官」³²(本家の叔父さん伯文は役所に訴えて出ようとまで言った)という記述があるので、「本家」(一族のある男)は、魯迅の叔父・伯文であろう。

この〔資料3〕を分析すると、〔資料3〕の中の事件は魯迅の実際に経験したことなので、〔資料2〕

と同じく、日本の自然主義文学の「事実性」という特徴と一致する。それに、〔資料3〕と次の〔資料4〕では、魯迅は男子と女子の断髪問題によって当時まだ残っていた封建主義の古い風俗を批判したものであり、日本の自然主義文学のもう一つの特徴である「社会批判性」も含んでいるとも言えよう³³。

〔資料4〕小説の中心内容における「事実性」の検証Ⅲ

最後の〔資料4〕は、本小説の三つ目の中心内容であり、N先輩が女の断髪について話している場面である。

“現在你們這些理想家，又在那里嚷什麼女子剪髮了，又要造出許多毫无所得而痛苦的人！”

“現在不是已經有剪掉頭髮的女人，因此考不進學校去，或者被學校除了名麼？”

（「今、君ら理想家は、また女の断髪とか騒いでいるがね。苦勞するだけでなんのいいこともない人間をまた作り出そうっていうのかね。」

「いまだって髪を切ったために、学校にも入れなかったり、退学になったりしている女が出ているじゃないか。」

これについては、1925年に発表された³⁴魯迅の「从胡須說到牙齒」の中で、この段に描かれた断髪した女に関わる記述が確認出来る。

但是到了民国九年，寄住在我的寓里的一位小姐考進高等女子師範學校去了，而她是剪了頭髮的，再没法可梳盤竜髻或S髻。到這時，我才知道雖然已是民国九年，而有些人之嫉視剪髮的女子，竟和清朝末年之嫉視剪髮的男子相同；校長M先生雖被天奪其魄，自己的髮頂禿到近于精光了，却偏以為女子的頭髮可系千鈞，示意要她留起。設法去疏通了几回，沒有效，連我也听得麻煩起來，于是乎“感慨系之矣”了，隨口呻吟了一篇『頭髮的故事』。但是，不知怎的，她后来竟居然并不留長，現在還是蓬蓬松松的在北京道上走³⁵。

（ところが民国九年になって、わが家に寄寓（きぐう）していた娘さんが高等女子師範学校に入った。彼女は髪を切ってしまっていたので、いまさら、まるくまげに結い上げることも、S字のまげに結い上げることもかなわなかった。事ここに至って、私はやっと、時すでに民国九年ではあるが、清朝末年に、断髪した男子を目の仇（かたき）にしたのと全く同様に、断髪的女子を目の仇にする者がいることを知ったのである。校長のM先生は、天に精気を奪われ、自分のおつむはつつつとなっているのに、女子の頭髮についてだけは大事なものだと思い込み、彼女に髪を伸ばせと指示した。何とか数回の調停を試みたが、効果なく、私のほうも話を聞くものわずらわしくなってきた、「これを憤慨せり」というわけで、ちょいと「髪の話」一篇を呻吟した次第。しかし、どういうわけか、それ以後彼女は髪を伸ばすつもりなどさらになく、今でもぎんばら髪として北京の街を歩いている。）³⁶

「从胡須説到牙齒」は、魯迅の雜文集『墳』(1929年)に収録されている。『墳』の序文には、「這總算是生活的一部分痕跡」³⁷(これは、ともあれ私の生活の一部分の痕跡だと言えるだろうからである)とあるので、「从胡須説到牙齒」の中に書かれたことは魯迅の實際の経験だと言える。また「从胡須説到牙齒」の中にある「寄住在我的寓里的一位小姐」(わが家に寄住していた娘さん)について、許羨蘇は『回憶魯迅先生』の中に、以下のように述べている。

女高師当局下令短髮的学生立即把頭髮養長，剪髮的同学(中略)誰也不遵命，学校当局又向各人的保証人，監護人和家長要求督促。我的保証人是本校教員周作人，他就退了聘書表示抗議，魯迅先生則因此写了一篇頭髮的故事³⁸。

(高等女子師範学校当局は学生に髪を長く伸びろと命令したが、断髪した学生は(中略)一人もこの命令を従わなかった。学校当局はまた学生たちの保証人と保護者に(学生たちを)督促してくださいと要求した。私の保証人は本学校の教員周作人であり、彼は任命書を学校側に差し戻し、抗議を示した。魯迅先生はこの件によって髪の話という文を書いた。)(論者訳)

このように、[資料4]の中の下線部の「剪掉頭髮的女人」(髪を切った女)は、許羨蘇である可能性が高く、魯迅は自分と出会った人々のことを材料として、小説の中に書き入れていたと言えるだろう。このような実在する自分の知り合いを題材するという方法は、他の魯迅小説にも存在する。たとえば『呐喊』に収録されている「故郷」も同じ手法が使われている。「故郷」の中に出た「閩土」と「楊二嫂」は魯迅の知り合いである「章運水」と「宝林娘」をモデルとしている³⁹。

紙幅の関係で4例に絞ったが、[資料1]から[資料4]までの分析内容を確認すると、N氏が辮髪を切ったことは魯迅の實際の経験に基づいており、断髪した女性の出来事も魯迅の実体験に基づいていた。そのため本作品に「事実性」が含まれていることは充分考えられる。

次に「焦点人物」についてであるが、[資料1]の分析によると、魯迅は自分自身を二人の人物に分け、主人公「N氏」と語り手「私」を設定している。そして魯迅はN氏の口を借りて自分の経験した辮髪を切ったこと、そして断髪した女性のことを語っている。そのため語り手と主人公と作者が一致する可能性は極めて高く、「焦点人物」という要素が含まれている可能性が十分に認められると言えよう。

また本作品中で魯迅は、男子と女子の断髪問題を取り上げ、当時まだ残っていた封建主義の古い風俗を批判した。詳述は避けるが、日本の前期自然主義文学の代表作である島崎藤村の『破戒』も社会批判的性格と告白文学的性格を有していたことは多くの先行研究が認めるところである。そのため「頭髮的故事」は日本の前期自然主義文学の強い影響を受けている可能性が高いと言えるであろう。

3. 「弟兄」に関する検証

本章では、小説集『彷徨』の中の作品「弟兄」を対象として、その中の自然主義的な要素を検証

したい。

「弟兄」は1926年に発表された小説である⁴⁰。「弟兄」の主人公の名前は架空であるものの、主人公の身に起こった事件は、1917年に発生した周作人の病臥をモデルとしており、魯迅弟の看病に励んだ魯迅の経験が反映している。それを裏付けるように『魯迅日記』の中には、この看病の記録が残されている。

一九一七年五月

十二日 晴。上午二弟就首善医院。(略)

十三日 晴。(中略) 二弟延 Dr Grimm 診，云是瘡子。(中略) 為二弟告假。

十四日 晴。自告假。

十五日 晴。自告假。

十六日 晴。午後自請假。下午延 Dr Diper 為二弟診⁴¹。

(十二日 晴。二弟、首善医院に行く。(略))

十三日 晴。(中略) Dr Grimm に二弟の往診を頼む。はしかという。(中略) 二弟に代わり休暇を願い出る。

十四日 晴。休暇をとる。

十五日 晴。休暇をとる。

十六日 晴。(中略) 昼すぎ、休暇をとる。午後、Dr Diper に二弟の往診を頼む。⁴²

なお、この小説を書く以前の1924年、魯迅と周作人の兄弟関係は険悪化し、以後没交渉となっている⁴³。この小説はその後で書かれており、魯迅は周作人との思い出を想起し、この小説を書いたと推断できる。この小説について、周作人も『魯迅小説裏の人物』の中で、「關於這篇故事，(中略) 只是說這主要的事情是實有的。」⁴⁴ (この作品について、(中略) ここに描かれている主な出来事は実際にあったということが言えるだけである。)と言っているのです。たとえ兄弟関係は険悪化したとはいえ、周作人はかつての兄からの恩を忘れてはいなかったのであろう。

以下「弟兄」の中から〔資料5〕を引用し、魯迅小説と日本の自然主義文学との関係について検討を試みることにしたい。

〔資料5〕

〔資料5〕は、沛君が同僚たちから最近の流行病の話聞いた後、急いで家に戻って、靖甫の様子を見る場面である。

他平時是專愛破除迷信的，但此時却覺得靖甫的樣子和說話都有些不祥，彷彿病人自己就有了什麼予感。這思想更使他不安，立即走出，輕輕地叫了夥計，使他打電話去問醫院：可曾找到了普大夫？

“就是啦，就是啦。還沒有找到。”夥計在電話口辺説。

沛君不但坐不穩，這時連立也不穩了；但他在焦急中，卻忽而碰着了一條生路：也許並不是猩紅熱。然而普大夫沒有找到，……同寓的白問山雖然是中醫，或者於病名倒還能斷定的，但是他曾經對他說過好幾回攻擊中醫的話：況且追請普大夫的電話，他也許已經聽到了……。

（彼は普段から迷信打破の主張者だったが、このときは靖甫の様子と言葉に何やら不吉なものを感じた。病人は何か予感しているらしい。そう考えると、いっそう不安になって、急いで部屋から出ると、そっとボーイを呼び、病院に電話をかけて、プティス先生の居どころがわかったかどうか、たずねてくれと命じた。

「はい、そうです。そうです。まだわからないのですね」、ボーイが電話口でそう言っている。沛君はいても立ってもおれなかった。いらいらしていると、突然、一筋の希望が見えた。ひょっとしたら、猩紅熱なんかじゃないかもしれぬ。しかしプティス医師の居どころはまだつかめない……同じ公寓にいる白問山は漢方医で、病名の診断ぐらいはつくだろうが、彼には何度も漢方医を攻撃する話をしたことがあるし、それに、プティス医師に催促の電話をかけたのが、聞こえたかもしれない……)

周作人の「魯迅小説裏の人物」によると、小説「弟兄」の「普大夫」のモデルは、狄博爾であると推断できるという⁴⁵。そして下線部の「同寓の白問山雖然是中醫，或者于病名倒還能斷定的，但是他曾經對他說過好几回攻擊中醫的話」について、「彼」は漢方医に不快感を抱いていたことが分かる。この記述について魯迅は『呐喊・自序』の中で、次のように述べている。

我還記得先前的醫生的議論和方藥，和現在所知道的比起來，便漸漸的悟得中醫不過是一種有意的或無意的騙子⁴⁶。

（以前の医者の話や処方はまだ記憶にあった。それをそのとき知ったものと比べてみて、しだいに漢方医とは、意識するにせよしないにせよ、一種のかたりにすぎないと悟るようになった。）⁴⁷

この記述から魯迅も「彼」と同様に、漢方医を好ましく思っていないことが分かる。

以上の資料に基づき、本小説「弟兄」の中の自然主義的な要素を確認する。まず「事実性」については、小説に登場する看病の内容は、魯迅の実体験であることは当人の日記からも明白であり、本作品には「事実性」が含まれると考えられる。

次に「焦点人物」についてであるが、主人公は兄の張沛君である。主人公と作者の関係について、小説は1917年に魯迅が周作人の病気を治すために苦勞したことを物語の原型としているので、主人公の張沛君は魯迅の可能性が高い。また小説の書き方について、語り手は出ていないが、魯迅は張沛君という人物を作り出し、自分の経験したことを材料として小説の中に書いている。「作者」と「主人公」は一致している可能性が高いので、「焦点人物」という要素が含まれている可能性が高いと

考えられる。

また「社会批判性」についてであるが、本小説は魯迅が周作人の病気を治すために苦勞したことをモデルとして作品を構成しているので、前期日本の自然主義文学の特徴である「社会批判性」については、あまり含まれていないと思われるのである。

以上、日本の自然主義文学の特徴に注目し、前期日本の自然主義文学の社会批判的性格と、後期日本の自然主義文学、いわゆる私小説の二つの要素である「事実性」と「焦点人物」の観点から、魯迅の小説「頭髮的故事」と「弟兄」に分析を加えた。分析した結果として、魯迅は創作時に自然主義手法を援用し小説を執筆していたことが判明した。

ただ、魯迅小説と後期日本の自然主義文学である私小説について、本稿によって分かったのは、魯迅小説が私小説の「事実性」と「焦点人物」という要素を含んでいたという形式面の類似性だけである。そのため、魯迅小説の文章形式や技法のごとき「ハード面」のみならず、「ソフト面」——つまり小説の主人公の思想、あるいは主人公の心境は当時の作者のものなのかについて、まだ検討の余地を残している。この問題はこれからの研究課題として、魯迅小説における私小説的要素をより多角的に考察を行いたい。

おわりに

本稿の内容を要約すると、次の通りである。

I 本稿では魯迅小説による日本の自然主義文学の受容関係について分析を試みた。本稿の分析によると、魯迅は小説集『呐喊』と『彷徨』を創作した時、前期日本の自然主義文学の特徴である「社会批判性」と後期日本の自然主義文学、いわゆる私小説の特徴である「事実性」と「焦点人物」を用いて小説を創作していた。そのため魯迅の小説集『呐喊』と『彷徨』は小説作法において、日本の自然主義文学の前期部分と後期部分両方の影響を受けていることが判明した。本稿のこの結論は、魯迅小説と日本の自然主義文学との間に密接な関連性があるという証拠になると言えよう。

II 日本の自然主義文学は田山花袋の『蒲団』を画期として、前期と後期に分かれている。前期の自然主義文学は、社会批判的性格と告白文学的性格を共存している。これに対して、田山花袋の『蒲団』の出現によって、日本の自然主義文学は作家たちの私的な領域へ没入する傾向を示し、社会批判という要素が失われ、告白文学的性格だけを持つ私小説に変質したという。

III 魯迅の小説集『呐喊』と『彷徨』について、本稿の分析によると、両小説集とも後期日本の自然主義文学、いわゆる私小説の「事実性」と「焦点人物」という要素が存在したが、『呐喊』の中の小説「頭髮的故事」では、魯迅は男子と女子の断髪問題によって、当時まだ生き残った封建主義の古い風俗を批判した。このように、『呐喊』の中の小説には、社会批判的要素も存在しており、社会批判的性格と告白文学的性格——つまり自然主義の前期・後期特有の傾向が共存し、小説集『呐喊』は日本の自然主義文学の前期と後期との両方から影響を受けていることが判明した。また小説集『彷徨』について、小説「弟兄」のように、社会批判的性格を含む事例は殆ど検出されず、専ら告白文学的性格だけが検出された。つまり『彷徨』の中の小説は、前期自然主義の社会批判的性格

が失われ、日本の後期自然主義、つまり私小説的な特徴が色濃く現れていることが判明した。

注

- 1 毛沢東『新民主主義論』（東京 華光社、1946年）31頁参照。
- 2 増田渉他『大魯迅全集』（改造社、1937年）
- 3 増田渉・佐藤春夫『魯迅選集』（岩波書店、1956年）
- 4 竹内好『魯迅作品集』（東京 筑摩書房、1966年）
- 5 竹内好『魯迅評論集』（岩波書店、1953年）
- 6 成俣吾『『呐喊』的評論』（『成俣吾文集』に収録する）（山東大学出版社、1985年）
- 7 周作人『魯迅の青年時代』（河北教育出版社、2002年）95頁参照。
- 8 『魯迅全集』巻16所収「魯迅著訳年表」（人民文学出版社、1981年）13頁参照。
- 9 『岩波講座 日本文学史』12巻 イルメラ・日地谷＝キルシュネライト著（岩波書店、1996年）95頁照。また、島村抱月も「文芸上の自然主義」（『早稲田文学』、1908年）の一文の中で、「自然主義といふ語の初めて我が小説界に掲げられたのは、多分小杉天外氏からであらう。氏は六七年前しきりにゾラを読んでゐたやうである。其の標榜するところの由来もおのづから察せられる。（中略）而して天外時代の自然主義は、或時は写実主義の蔭に蔽はれ、（中略）未だ一世の風潮となるに及ばなかつた。」のように、日本の自然主義文学とヨーロッパの自然主義との関連性およびその初期の写実的傾向を述べている。
- 10 田山花袋著『田山花袋集』（東京 筑摩書房1966年）
- 11 島崎藤村著『島崎藤村集』（東京 新潮社、1970年）
- 12 田山花袋著『田山花袋集』（東京 筑摩書房1966年）
- 13 『岩波講座 日本文学史』12巻 イルメラ・日地谷＝キルシュネライト著（岩波書店、1996年）97頁参照。
- 14 『岩波講座 日本文学史』12巻 イルメラ・日地谷＝キルシュネライト著（岩波書店、1996年）98頁、106頁参照。また、吉田精一も『現代日本文学史』（桜楓社、1980年、67、68頁）の中で、「『蒲団』は、（中略）それ以降の自然主義に手法上、方向上の影響を与えた意味で、歴史的には重要です。（中略）『蒲団』と『破戒』とは、ともに自己告白的内容と性格は共通していても、『破戒』には、（中略）深刻な社会問題がありました。ところが、『蒲団』には、自分の身の経験だけを端的につきだした、幅の狭さが目につきます。」のように、同じく『蒲団』を以て、自然主義の社会性の喪失を述べている。
- 15 『岩波講座 日本文学史』12巻 イルメラ・日地谷＝キルシュネライト著（岩波書店、1996年）114、115頁参照。
- 16 吉田精一『現代日本文学史』（桜楓社、1980年）65頁参照。
- 17 『魯迅全集』巻1所収『呐喊』人民文学出版社、1981年）465頁参照。
- 18 周遐寿著『魯迅小説裏の人物』（上海出版公司、1954年）30頁 32頁参照。また、丁爾綱も『魯迅小説講話』（四川文芸出版社、1985年、125頁参照。）の中で、「N 這個形象，使我們連想到魯迅在五四運動時期的某些思想和氣質。」（N という人物は、われわれに魯迅の五・四運動時期のある思想と氣質を連想させる。論者訳）のように述べ、魯迅と N 氏の相似性を主張している。
- 19 『魯迅小説裏の人物』の訳は「周作人著 水野正大訳『魯迅小説のなかの人物』（東京、新風舎、2002 年）」から引用した。以下同じ。
- 20 引用資料の訳については『魯迅全集』（学習研究社 昭和59年）から引用した。以下同じ。
- 21 鄭欣森 孫郁 劉増人編『2002年魯迅研究年鑑』（人民文学出版社、2004年）416、417頁 李明「論魯迅自我小説中的自我表現形式」
- 22 魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅年譜』巻1（人民文学出版社、1981年）104頁参照。
- 23 黄喬生『周氏三兄弟 - 魯迅三兄弟恩怨変遷』（浙江人民出版社、2008年）277頁参照。

- 24 周遐寿著『魯迅小説裏の人物』（上海出版公司、1954年）33頁参照。
- 25 『魯迅全集』巻7所収『集外集』（人民文学出版社、1981年）83頁参照。
- 26 注20と同じ。
- 27 『魯迅全集』巻6所収『且介亭雜文』（人民文学出版社、1981年）187頁参照。
- 28 注20と同じ。
- 29 『魯迅全集』巻6所収『且介亭雜文』（人民文学出版社、1981年）3、4頁参照。
- 30 注20と同じ。
- 31 『現代漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、2000年）2026頁参照。
- 32 黄喬生『周氏三兄弟-魯迅三兄弟恩怨變遷』（浙江人民出版社、2008年）281頁参照。
- 33 愛新覺羅ウルピチュンは「最後の公爵 愛新覺羅恒煦—激動の中国百年を生きる」（朝日新聞社、1996年）一文の中で、「清朝は辮髪を拒否する者には死刑を以て臨み「頭を残す者は、髪を残さず。髪を残す者は、頭を残さず」と言われた。（中略）しかしながら、近代になると「反清」を標榜する証として辮髪を切る者も現れた」と述べているので、封建王朝の統治象徴である「辮髪」を切ることは、封建政府への反抗を意味している。しかし、本小説の中で、辮髪を切った主人公Nは、周囲に受け入れなかった。作者はこういう現象によって、当時の民衆はまだ封建的な思想が残っていたことを描き、社会の中にある封建主義の古い風俗を批判した。
- 34 『魯迅全集』巻1所収『墳』人民文学出版社、1981年）251頁参照。
- 35 『魯迅全集』巻1所収『墳』人民文学出版社、1981年）245頁参照。
- 36 注20と同じ。
- 37 『魯迅全集』巻1所収『墳』人民文学出版社、1981年）4頁参照。
- 38 許美蘇『回憶魯迅先生』『魯迅研究資料』第三輯に収録する。（天津人民出版社、1980年）210頁参照。また、范伯群・曾華鵬は『魯迅小説新論』（人民文学出版社、1986年、99頁）の中で、「許美蘇投考女高師（中略）可因她是短髮女子而未被錄取。魯迅（中略）隨口呻吟了一篇頭髮的故事」（許美蘇は女子高等師範校の入試を受けた（中略）が、彼女は短髪なので、採用されなかった。魯迅は（中略）ちょっと「髪の話」一篇を呻吟した。論者訳）のように、同じく「髪を切った女」は許美蘇であると記述している。
- 39 またこのような手法は島崎藤村の技法にも似ていたと考えられる。例えば日比嘉高は「写実小説のジレンマ—島崎藤村とモデル問題」の中で、「彼（島崎藤村、筆者注）は旧師、近隣住民、友人、知人、**亲戚**など多数の人々を取材源とし、みずからの小説の題材として用いた。」とも述べている。日比嘉高「写実小説のジレンマ—島崎藤村とモデル問題」（『名古屋大学文学部研究論集』2011年）参照。
- 40 『魯迅全集』巻2所収『彷徨』（人民文学出版社、1981年）143頁参照。
- 41 『魯迅全集』巻14所収『魯迅日記』（人民文学出版社、1981年）273、274頁参照。
- 42 注20と同じ。
- 43 『魯迅全集』巻14所収『魯迅日記』（人民文学出版社、1981年）500頁参照。
- 44 周遐寿著『魯迅小説裏の人物』（上海出版公司、1954年）195頁参照。
- 45 周遐寿著『魯迅小説裏の人物』（上海出版公司、1954年）196頁参照。
- 46 『魯迅全集』巻1所収『呐喊』『自序』（人民文学出版社、1981年）416頁参照。また、周作人も『魯迅小説裏の人物』（上海出版公司、1954年）197頁参照）の中で、「著者遇到中医是不肯失掉机会不以一矢相加遣的。」（作者が漢方医をもちだすときは、どうしても厳しくならざるをえなかった。）のように、魯迅は漢方医を好ましく思っていないと述べている。
- 47 注20と同じ。